エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２４４号

2022年８月１日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西2-14-28　山口周三

電話　080-1232－0905

http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源先生「コリント人への第１の手紙講解説教」より（１４）

テモテとアポロについて

わたしは、マケドニアを通過してから、あなたがたのところに行くことになろう。マケドニアは通過するだけだが、あなたがたのところでは多分滞在するようになり、あるいは冬を過ごすかもしれない。……しかし五旬節まではエペソに滞在するつもりだ。……もしテモテが着いたら、あなたがたのところで不安なしに過ごせるようにしてあげて欲しい。（コリントⅠ 16・5-12）

〔パウロの旅程を述べた後〕次に、パウロの助手テモテの旅程に入ります。彼は、青年で、感受性の強い臆病者であったようであります。また、教養もあまりなかったようです。それ故に、コリント教会では、彼を軽くあしらっていました。それでは困るので、パウロは、片腕である彼をパウロの訪問の準備として先に送りました。テモテはパウロに５年以上も仕えておりました。この彼は

パウロの助手として働く光栄を持ちました。これは、人の知らない光栄であります。我らまた能力なくとも、置かれたる地位においてパウロの助手でなしに、キリストの助手として、この人生において働きたいと思います。

アポロはパウロの競争相手でした。コリントにおいては、自分はパウロにつく、自分はアポロにつくと、ごたごたやっておりました。このアポロに対して、パウロは一緒に教えに行ってくれと懇願しています。この二人は実に仲が良かったようであります。使徒行伝には、アポロが福音の理解において未だ不十分であったように書かれておりますが、その彼に、どうか行ってくれと頼んでおります。この実に紳士的なパウロの態度を深く学ぶ必要があります。これに対して、アポロも「いや、今回はやめておきます」と答えてパウロに譲っています。アポロは、以前にはコリントに伝道に行きたいと言っておりましたのに、譲っております。このアポロの態度も見上げたものであると思います。

信・望・愛

目をさましていなさい。信仰に立ちなさい。男らしく、強くあってほしい。いっさいのことを、愛をもって行いなさい。（コリントⅠ 16・13,14）

ここは、コリント前書の要約であります。

この最後の要約の順序に注意して欲しい。「人を愛せよ」とか、「男らしく、強くあって欲しい」ということは最後に書かれています。最初には「目を覚ましていなさい」が来ています。即ち「主イエス・キリスト来たり給う、その復活の望みに目を覚ましておれ」が先に来ています。これがコリント前書全体の精神です。「望み」が先です。これは、この世の道徳の言わざる所であります。キリスト教独自の言葉であります。その後に、「信仰に立て」がきます。「キリストを信ぜよ」がまたここに出て来ます。如何にキリスト教が「望みと信仰」に重点が置かれているかが分かる。それから「愛」即ち「行ない」が出て来ます。どうぞ、この教会に来て下さる方は、「望み」について少し学んでもらいたい。これはキリスト教の奥義です。信じない人あり、疑う人あり。疑う人は無理に信じなくてもよい。「信・望・愛」がパウロのロマ書であり、手紙のすべてであります。どの書簡を見ても同じことを言っているのであります。

アクラとプリスカ

「アジアの諸教会から、あなた方によろしく。アクラとプリスカとその家の教会から、主にあって心からよろしく。」（コリントⅠ 16・19）

最後に友人を勧めています。パウロには多くの敵がおりましたが、友人もありました。テモテの如く、若く、また学問もなく、この世においては、それ程優秀な者ではなかったけれども、パウロを助けました。アクラ、プリスカという名も出て来ますが、彼らはパウロを助けて、コリント教会の創設に力を尽くした人です。ちょうど、石館兄弟がこの高円寺東教会を創設した如くに、彼らがいなかったら教会は出来なかった。その人々を推挙しています。「この人々の言うことに従ってくれ、重んじてくれ」と言っています。私は、本当の人というのは、ちょっと見たら偉そうに見えない凡人であろうかと思います。普通の人にはその偉さが分からないのだと思います。そういう人になって欲しい。「クリスチャンでござい」という者、そんな者は駄目です。普通の人でよいのです。

パウロの伝道を助けた人々

〔コリント前書 16 章〕19 節に、自分の挨拶の前にアジアの諸教会からの挨拶を上げました。パウロはどこまで人を尊敬し、愛しているかがこれで分かります。パウロはアジアを廻っておりませんが、当時、代表者が来ていたらしい。彼らもパウロの周りにいて、彼を助けていたようであります。次の、自分と関係の深いコリント教会とエペソ教会の創設者、アクラとプリスカをあげました。学問もない普通の人であったに違いない。彼らはパウロのために命をささげたと使徒行伝にあります。そういう人のお陰でパウロは伝道が出来た。ルカ伝には、婦人たちが自分の財産を捨てて、イエスの伝道を助けたとあります。実に隠れた人々によって、イエスやパウロの伝道がありました。

マラナ・タ

最後に、自分からよろしくと書いてあります。これは、パウロの署名です。次に、主を愛さない者がコリント教会にいるから、「主を愛する者になってくれ」と言っています。「のろわれよ」とはそういう意味です。「マラナ・タ」は、アラム語の二字から成っており、ギリシア語に訳した言葉ですが、「主」と「来る」という字です。3 種の訳しかたがあり、クリソストムは、「主が来りたもうた」と訳し、「主が来たり給いつつある」と訳したり、「主よ、来り給え」という解釈もあります。初代教会はこの言葉によって動かされておりました。この頃の教会はどうですか。初代教会のような力が無いというのは当然です。力の源を持たずして、力を持とうというのは不可能です。初代教会の信者は、主が来り給うて、我々が復活するとき、イエス・キリストの復活体と同じ復活体を頂く時、我々のキリストの救いが完成する時、その光栄や如何、その喜びと望みに躍動していました。それ故、なにものも恐れなかった。「マラナ・タ」という言葉は、ヨハネ黙示録の最後の言葉です。

イエス・キリストの恵み

〔コリント前書第16章〕23節、24節に「主イエスの恵みが、あなた方と共にあるように。私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがた一同と共にあるように」とありますが、これが、パウロの願いです。コリント前書の第1章1−3節と、この最後のことばをよく読み比べて下さい。コリント前書は、実に、「イエス・キリストの恵み」に始まって、「イエス・キリストの恵み」に終わっています。「わたしの愛が」という字と「あなた方一同」という字に注意して欲しい。一同とはすべてであります。コリント前書は「キリスト・イエスにあって」という言葉で終わっています。パウロはコリントの教会を愛しましたが、コリント教会の数名はパウロを侮辱しました。パウロ先生にして、人に侮辱されたのであります。我々のような伝道者が侮辱されるのは当然です。

　私は、このパウロ書簡の講義を終わるにあたりまして、このパウロの愛が迫るのを感じます。パウロの望みが迫るのを感じます。パウロの信仰が我々に迫るのを感じます。諸君はどうですか。

10年後の感想

10年前には、コリント前書の講解説教は、これが最後になるであろうと言っておりましたが、健康が許されて、再度、同じ場所を講義出来ますことを誠に有難く感じます。10年前の講解を聞きまして、これに何ら付け加えることはありません。第16章13節に「目をさましておれ」「復活の望みを持て」と、22節に「マラナ・タ」（主よ、来り給え）とありますが、この言葉にかかっています。これがどれだけ分かっているかということが、我々にどれだけの力が出て来るかということであります。我々がこの世の悲しみ、苦しみに勝ち得ないというのは、これが分かっていないためであります。これが分かるにつれて我々に力が出て来ます。己に勝つ力が出て来ます。これがキリスト教の専売特許であります。「愛せよ」というようなことは、数学でいえば、幾何学、代数学のようなものです。算術を知らずして、代数は解けません。「人を愛せよ」と何遍聞いても、また何遍人に勧めても、それは駄目です。力が無いのですから。問題は力であります。「愛を行なう力」です。代数、幾を解く力は、算術から来ます。算術の加減乗除、これが、がちっと出来なければ問題になりません。諸君、この「復活の信仰」に学び給え。代数幾何学をやりたければもっと算術を勉強して下さい。

信仰と愛とを最も力づける望み

コリント前書を学びます前に、ロマ書を２年にわたって学びましたが、ロマ書とコリント前書とは、その中心的真理が全く一致しているということであります。パウロは同じことを繰り返して述べております。誠に、一つのことを材料を異にした文字を用いて述べている感がいたします。誠に不思議に心を打たれるのは、同一字の繰り返しということであります。その内容は、一言にしていえば、イエス・キリストの贖いを信じるという信仰のことと、信仰を持っていながら、この世で生活をして行く上に、過ちを多くやっている、ということです。その愛の欠乏のゆえに、そこで、愛のことを勧めております。それから、信仰と愛とを最も力づける望みについて、最後に、第15章で、復活論を展開しております。ここに、「信・望・愛」の三つを述べていることは明らかであります。

「イエス・キリストに在る」（エン・クリストー）

「あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである、キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。それは、『誇る者は主を誇れ』と書いてある通りである。」（コリントⅠ 1/30,31）

私は、信仰の奥義を現す言葉として、〔コリント前書〕第1章の30，31節を挙げます。内村先生はこれがキリスト教の全部であると言われました。キリスト教を1節に表すならばこれである（30節）と。この1節が分かればキリスト教は卒業です。「イエス・キリストに在る」（エン・クリストー）という言葉は、パウロの一枚看板です。イエス・キリストが神に立てられて、私達の知恵となって下さった。知恵の内容は、私達の義となって下された。聖となって下された。贖いとなって下されたことであります。これが、知恵の内容であります。「イエス・キリストに在る」とは、イエス・キリストが私の義であり、私の聖であり、私の贖いであるということですから、私のすべてである、ということであります。換言すれば、イエス・キリストが私の救いを完成して下さったのであります。人間の知恵、努力の一点一画を加える必要がないということです。初めに義とさせられ、途中で清められ、最後に復活せしめられる、という過程全てをイエス・キリストが私たちのために完成して下されたのであります。福音の内容はこれに尽きます。

信・望・愛

「このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちでもっとも大いなるものは、愛である。」（コリントⅠ 13・13）

この「愛」についてはすでに詳しく学びましたが、親子、兄弟の愛、あるいは値打ちあるものを愛するエロスの愛とは根本的に異なります。この「愛・アガペー」は、神の知恵によるもので、内容はキリストが十字架について、我々のために、義となり、贖いとなられたという、神の無限の愛であります。神の知恵の具体的内容はこの「愛」であります。この「愛」を信じる時に、我々にも神のアガペーが与えられるのであります。神の子とせられた外の姿が「愛」であります。「愛」の欠乏は、その根底にある信仰がないことになります。「信・望・愛」は同じものの姿です。信仰、即ち福音を受け入れなければ、愛は出て来ない。従って最もなくてはならないものは「信仰」です。最も大切なものは「希望」です。

コリント前書第 15 章の復活論

〔コリント前書〕第 15 章の復活の希望がなければ、愛の力が出て来ません。キリスト教の愛は、信仰と望みとが合体したものです。コリント前書の広範囲は、復活のことが書かれています。ここは、注意して下さい。第 15 章に、いよいよ最も大切な復活論が出て来ます。新、旧約聖書を通して復活論はこの場所だけであります。復活論については、6 回にわたって勉強いたしました。

一言付け加えたいことは、復活論が現代を生きるのにどんなに力成るかということです。パウロは「日々死す」と言いました。そのパウロがあらゆる困難に耐えることが出来た。その唯一の理由は、「我、復活する」「イエスの復活体の如くに自分も復活する。その復活を目当てに日々歩んでいる」という望みがあったことによります。これが、初代教会が巨大なローマ帝国に打ち勝ち、ライオンの恐ろしさをも、ものともしなかった力が湧いた源であります。

復活の望みに堅く立って動かされるな

「だから、愛する兄弟たちよ、堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはないと、あなたがたは知っているからである。」（コリントⅠ12.58）

要するに、「復活の望みに堅く立って動かされないようにあれ」ということです。これが、信者に対する唯一の命令であります。この節はコリント前書の最後の結論であり、聖書の結論でもあります。主の業に励みつつ、永遠の生命に向かって走れ、ということです。伝道者にとって、主の業は福音の伝道です。諸君にとっては、日々目の前の義務です。人を愛することを抜きにして、神を愛することはあり得ません。それと同じく、毎日自分に与えられた業を抜きにして、神に対する奉仕の業はありません。クリスチャンはこのことをしっかり知らなければいけない。どうぞ諸君は、どんな小さな業でも、誠心誠意やっていただきたい。これが最後の勧めであります。…聖書は繰り返し、同じことを言っています。ロマ書と内容は同じです。ガラテヤ書もまた同じことです。我々はこのことを死ぬまで学びます。

自分の程度より高い知恵の獲得のためには

内村先生は、明治 45 年、52 歳にして、一人娘のルツ子さんを亡くされました。そして、いよいよこの復活の希望が先生の大伝道を支えました。先生の真の伝道は 57 歳からです。人間は準備が大切です。死ぬまで準備していてよろしい。モーセは 80 年間準備した。イエスも 30 年間準備をしておられた。パウロの伝道も大体 50 前後に始まっています。我々は急ぐ必要はありません。……

信仰は、神の知恵であります。自分の程度よりも高い知恵を自分のものにするためには、「信じること」が必要です。自分で分かることであれば信仰は不要です。2 プラス 2 が 4 であることには、信仰を要しません。しかし、我々の頭脳ではわからない、もっと高い知恵を自分のものにするためには、「それは本当である」と信じるほか、方法がありません。主よ、我々を謙遜ならしめたまえ。アーメン。